

第1章 序論

1-1 本研究の背景

近年、観光形態が「大量輸送・周遊型」から「個人志向・滞在型」へと変化し¹⁾、観光客の志向が地域密着型の旅行へと向けられるようになっている。歴史散策・ウォーキングなどで観光地としては未発達な地域を観光する個人旅行が、時間的にも経済的にもゆとりのある中高年齢層に受け入れられ、ブームとなっている。型にはまった従来のマス・ツーリズム的な観光形態から脱却し、多様な興味対象（何気ない町並み、生活文化、産業遺産など）が注目され始め、それを楽しむための手段として「歩く（ウォーキング）」観光形態が改めて見直されてきている²⁾。同時に、観光者の多様な興味に対応するべく、地域に埋もれた観光資源を読み解き、地域を訪れた観光者に解説するガイドやインタープリターといった役割を担う地域住民が必要とされるようになった。ここでは、地元住民とのふれあいや生活体験を求められるため³⁾、地域住民がホスピタリティを持つようになり、地域住民のホスト化が進んでいる。



（2004.3.26 撮影）

図 1-1 豊郷町観光協会ボランティアガイド「扇会」の案内による散策の様子

地域住民参加型まちづくりの必要性や有効性⁴⁾が叫ばれ、観光振興の場面でも地域住民のホストとしての役割が重要視されている。国土交通省では、「観光は、住んでよし、訪れてよしの国づくり」を統一目標とした観光週間を昭和 40 年から毎年（8 月 1 日～7 日）実施している⁵⁾。住民が日本人のみならず外国人観光客に対してもおもてなしの心を持ち、自らが住んでいる地域の魅力を十分認識し、自信と誇りを持つような国民の意識喚起を図ることなどを課題として挙げ、地域住民の役割の重要性を色濃く表している。

政府指導の下、各自治体が個性的な取り組みを展開する中、地域住民のホスト化の成功例としてまちかど博物館活動が注目され全国に広がっている。まちかど博物館とは、市民が持つわざやコレクションをその場で展示した小規模な博物館であるが、単純に集客効果

や準備の手軽さのみが魅力として捉えられ、活動のコンセプトやPR、地域住民へのサポート体制がしっかりと整えられないまま、自治体や市民団体がまちかど博物館活動に取り組む事例が増えるのではないかという懸念がある。

滋賀県愛知川町内の商店街にいくつかの商店の協力を得て「愛知川宿まちかど博物館」が常設されている。設置後4年が経とうとしているが、注目されていた開設当初に比べ、来館者が減少し続けていることや、それに起因する一部の館長や家族のモチベーションの低下、また、まちかど博物館の設置を呼びかけた代表者への依存のため各館長の主体性が弱く、活動の幅が広がらないといった現象が起こり、今後の活動の継続性が危惧されている。

地域住民のホスト化とは、地域住民の協力は、参加する地域住民のやりがいや成長と引き換えに無償で提供される。しかし、無償だからといって主催者（行政や市民団体）側が地域住民の立場を無視してはならない。地域住民は「ホスト」である以前に、「生活者」であるためである。特に、まちかど博物館の館長というホストにおいては、「ホスト」役と「生活者」役との二役を演じるのが、従来の生活に支障をきたす危険性がある。さらに、継続的な活動ともなると、その負担が増大する恐れがある。その一方で、地域住民の負担の削減のために主催者側の過剰なサポートは、地域住民の主体性を失う恐れがある。つまり、「主役（館長）」と「サポーター（主催者）」とのバランスが、まちかど博物館の継続性に影響を与えていると考えられる。

1-2 本研究の目的と意義

これらの背景をふまえて本研究では、継続的に活動しているまちかど博物館の事例を対象にまちかど博物館の継続性における要件について考察することを目的とした。まちかど博物館に取り組んでいるもしくは取り組もうとしている自治体や市民団体に対してまちかど博物館の継続性における要件について提示できることが研究の意義としてあげられる。

1-3 本研究の構成

本研究を明らかにするためのプロセスとして、下記のように論文の構成を行った。本論文は結論をふくめて7章から構成されており、各章における研究の目的および方法は以下の通りである。

第2章では本研究および本研究で扱う「ホスト」の位置づけを行う。具体的には、全国における「まちかど博物館」の事例整理から本研究を位置づけと「まちかど博物館」における課題を把握する。

第3章では、研究対象として選定した東京都墨田区の「小さな博物館」について、「墨田区の歴史」なども踏まえつつ概要をまとめるとともに、調査方法と分析方法について述べ

る。

第4章では、調査結果をもとに、「小さな博物館」の時代変遷と主催者である墨田区の「小さな博物館」への関わり方とともに、各博物館の概要をまとめ、全体的な特徴を把握する。

第5章では、1993年における「小さな博物館」に対する調査結果と現在の調査結果の比較を行い、2005年までの経過と現状をそれぞれ整理、分類する。その分類項目別に考察を行い、課題を把握する。

第6章では、5章を受けて、20年間の館長意識の形成、維持における影響要因を解明するために、館長意識の継続性に関する分析と世代交代に関する分析の2点について試みる。

第7章では、本研究の総括であり、結論と今後の課題を述べる。

第1章 脚注及び引用、参考文献

- 1) 加藤麻里子,他:地域住民による観光のランティガイド活動の実態と動向に関する研究,ランドスケープ研究,66(5),799-802(2003)
- 2) 小林浩:地域観光ガイドの活動実態とその意義に関する研究—特に教養観光の推進に関連して—,千葉大学大学院教育学研究科社会科教育専攻地理学修士論文(2003)
- 3) 荒井崇浩,十代田朗:観光地化に伴う農山村伝統集落の空間変容及び住民生活への影響に関する研究—富山県五箇山相倉集落を事例として—,都市計画 別冊 都市計画論文集,(37)949-954(2002)
- 4) 前掲書:
- 5) 国土交通省 観光週間 < <http://www.mlit.go.jp/index.html> > 2006-1-10